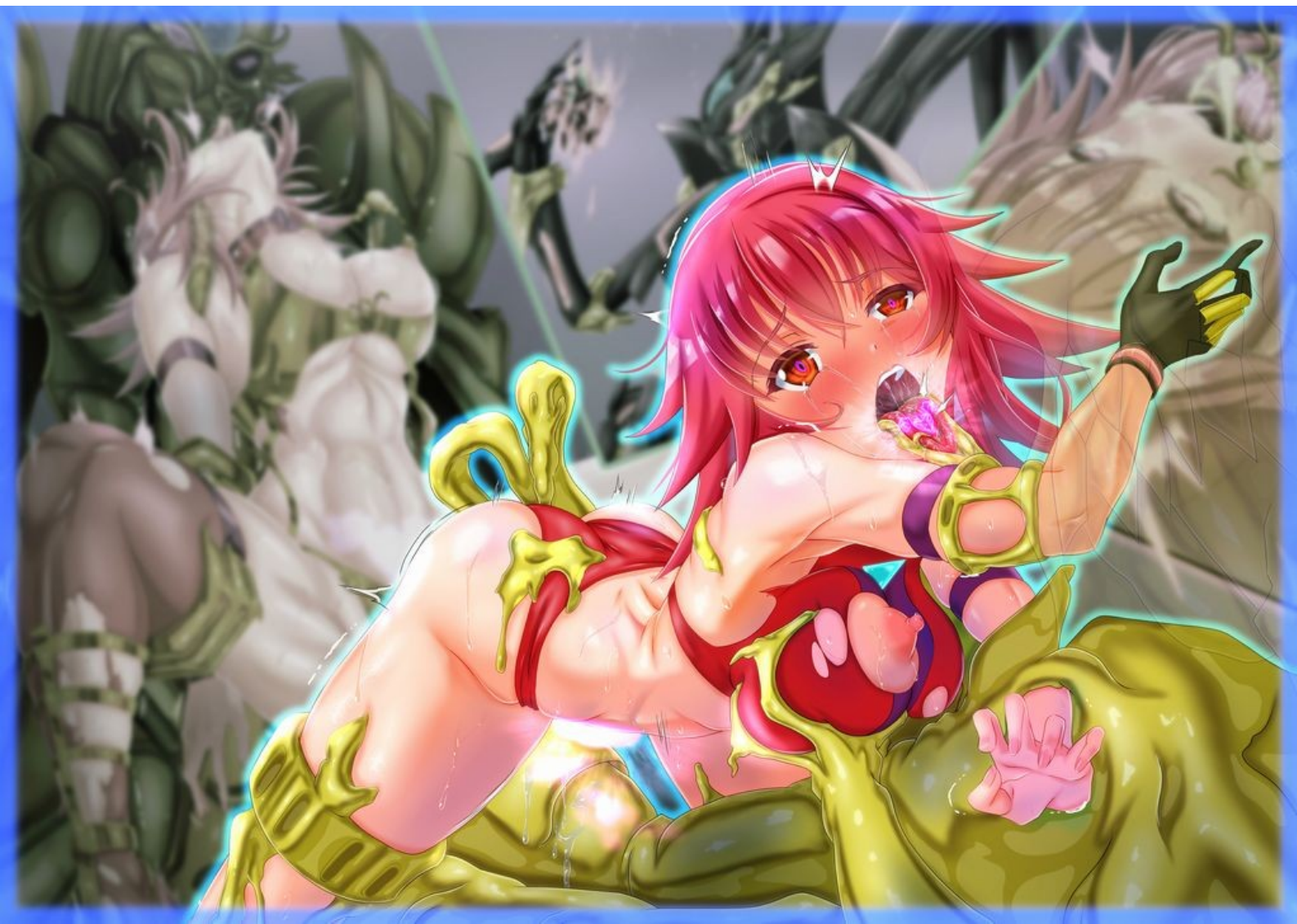






「いい顔じゃねえか、やっと女らしくなったなあ。」

「はっ……は、も、ひゃめ……うっ……はひええ♡♡！」

アイシヤを捕らえた黄金のスライム、
現れた時は3mに届く巨体だったのだが
それから三回り程小さくなり、大柄な男性程度の
体格に変化した。

アイシヤの足に纏わりついていたスライムは
その形を硬質な拘束具の様な形に成り、
腕は変わらず胴体に取り込むように拘束する事で
アイシヤに強制的に四つん這いの様な姿勢を取らせる。

「うひゃー♡♡……はっ……はっ……あんひゃ……うっ……いひよう……
えりよう……へっ……♡♡！」



「へっへっ舌だけで感じちまうか？
じゃあまたアレでいくか？」

「あええ♡…！？ ひゃえー！ ほお…らひま。」

ぐわん
ぐわん
ぐわん
ぐわん

黄金鬍髯が何をするのか十分理解しているアイシヤはそれをやめさせようとするが、蕩けた顔でされる抗議は黄金鬍髯に伝わるはずも無く――。

舌と下腹部に刻まれた淫紋が明滅する度にアイシヤの体がビクンビクンと大きく痙攣する。

——いつこの淫紋が刻まれたのか？
それはここに来るまでの道中で襲われた触手の群体
オステオン・シテールロスによって行われたものだ、
その瞬間は全身を襲う快楽の所為で波状攻撃の
一つとして誤魔化されてしまったのだが、
それは確実に定着するまでその存在を隠し
発動する時間差の淫紋だったのだ。

その淫紋はそれ自体強力なものでは無かった、しかし舌に刻まれた事が非常に厄介だった。

淫紋は下腹部に刻む事で主に子宮から体中を隈なく発情状態にし、体を蕩け墜とし最終的に思考を奪うものなのだが、頭から比較的遠い位置にある下腹部に刻まれても思考にまで影響が出るのだ、そんなものを舌などに刻まれてしまえば、その快楽効果はダイレクトに脳内を駆け巡ってしまう。

浮紋が輝くと目の前に桃色の稲妻が走り、意識がピンク色の光に覆われる、まるで脳に直接電流を流されたように瞳が裏返り、全身が快感を受けた時とは違う異常な痙攣を起こし、2つの浮紋が合わさってしまった事で乗算され許容を超えた快感に潮が吹き出す。

もし手足を拘束されていなかっただらば壊れた玩具のように暴れ回ってしまっていただろう。

淫紋の光が弱くなる、強烈な快感効果は黄金體の意思で発動するがその時間は数分、そして次の発動までにはある程度の時間を要するようだった。

だが頭の奥まで痺れさせる快感が直ぐに収まる事などなく、無様なアへ顔を晒し続けるアイシャ、

徐々に思考も戻ってくるが眩暈がするような感覚が収まらない、また脳から神経を伝った快感電流は体の隅から隅まで

ジクジクとアイシャを蝕み、少し触れられるだけでも体が絶頂寸前まで駆け上がったてしまいそうになる。

「はぁ♡ハア♡ん♡♡♡」

「…どうすれば、うんぬん…」

過去に淫紋は何度も受けた事がある、勿論厄介なものだが
そんな状況も何度も乗り越えてきた、

だがこの舌の淫紋というのは想定を超えた代物で、
二度発動されるだけで思考が全て快感に攫われてしまう、
それもある程度収まった時に感じるものであつて、
淫紋発動中は三瞬で思考にも意識にも
桃色と白い光が交互に激しく点滅し何も考える事が出来ない。

実はオステオン・シデールロスの淫紋を刻む機能には
一つは下腹部に、二つは膣内、もしくは子宮に直接
刻むようにプログラムされていた、

だが刻むその瞬間、性器周辺は他の触手に占領されていたので
手近な粘膜部分という事で口に飛び込んだという
誤作動による出来事だったのだが
それがアイシャを激しく追い詰める形になったのだった。





「ふっ♡はぁ♡えっ♡」

「んっ♡」

「んっ♡」

「んっ♡」

「んっ♡」

「んっ♡」

「こりや……最高……だぜ……」

黄金胴體が大量の精をアイシヤの膣内に放つ、アイシヤからは見えないが、その色は金色掛かった人間の精液とは違う物だったが、その色は金色掛かった人間の精液。中の男はしっかりと射精の快感を味わっていた。

「よし、
今だっ！」

子宮にまで流れ込む射精感の絶頂を堪える事が出来たアイシャ、この間に黄金體のコアと思われる部分は特定している、後はそこに十分貯めたこの破壊エネルギーをぶつけるだけだ、その一撃を放とうとアイシャは拳を握り込もうとするが……それが出来なかった。

「……えっ？　なんで？　指が……体が動かない……」

拳を握ろうとしたが指が全く動かない、それどころか拘束されている。とはいえ多少は動かせていた体も一切動かせなくなっていた。

なんとか力任せに脱出しようとするがその中で気付いたのは視線と舌、そして筋肉は動くのだがまるで体の芯を固められたような、そんな不思議な感覚に困惑するアイシャ。

「……なんだ？　おう……は？　チツ、だから女はよお……
……テメエ、何しようとしやがった。」

黄金鬍髯が度々行う何かと会話するような仕草の後、明らかに苛立った様子でアイシャを睨むと額の青い石の強く発光しアイシャに浴びせられる。

「はぁ……は、へえ……。
(マズ……った……)」

強烈な発光はアイシャの体から力を奪い貯めた力が霧散する、その脱力感に閉じられなくなった口から間拔けな声が出るが、だが黄金鬍髯の怒りがそれで収まる筈は無く、その眼が怪しい光を放ち始める……

「テメエみたいな女はしっかり調教してやる、死んでもいいや、しばらくイキっぱなしになつてろ。」

——オステオン・クリューソス——

全てのオステオンシリーズを統率、制御し、オステオン・カルコスとアルギュロスの特徴を合わせ持つている黄金の王。

クリューソス特有の能力として体に注入されると体の芯、骨が固められ自由を奪われてしまう特殊な液体を生み出す事が出来る。

クリューソスの元になったマールゴは体中から黄金色の粘液を吹き出し、それを浴びた者は固められ像にされる、そしてその像からエネルギーを吸収するマールゴだったという。

ラクエウス・ガーセクトはその強力な能力に目を付けたが、生物を黄金に固める能力は殆ど消滅しておりそこから生物の二部を能力的に固めるといふ部分の抽出に成功した。

ラクエウスは固める箇所を体の芯たる骨にする事で、最小限の効率でその性能を発揮できるようにし、その液体に

——金色の傀儡毒——
と名付けた。

オステオンシリーズの当初のコンセプトは自己拠点制作型アイテムとして設計された。

建物に金、銀、銅、3つの調度を配置する事でそれが迷宮を作り出し、その後は自動で軍勢やトラップを作り出し拠点を築いていくというものだった。

だがオステオン自体は生物では無い為、その元となる生きた人間をクリュールソスと融合させる必要があった。

人と融けあつたクリュールソスは最初の形態を経て

取り込んだ人間の思考を徹底的に読み取りその者が潜在的に望む姿を構築する、

その際思考を解析される影響を取り込まれた者の性格が暴力的になる等の副作用等も確認されており、

この時点からこのアイテムはラクエウスの設計計画との乖離を見せ始める。

その後も開発は難航を極め計画自体凍結されていたが、使用期限間近にラクエウスの旧知のマーゴによりもたらされた青い光を放つ鉱石を組み込んだところ、最低限の機能が使える状態になった為、今回のラクエウスが逃走する時間稼ぎとして使用される事になったのだった。



「ロボが喋ったつていいだろ、
後オレはアニマウエポンだ、ロボじゃねえ。」

「うつるせえ！、今から殺してやる……？、な、で、うごけ、ねえ。」

突然怒り狂うクリュース、目の前のロボを破壊すべく動くが
そのままの体勢何も出来ず、動くことが出来ない。

「そりやあ体の制御をするコアを壊したからな、
バカのクセにまだ滅びてねえだけ大したもんだろ。」

あきれたように説明する黒いロボ、先程塵になった緑色の物体が
オステオン・クリュースのコアだった、
そして意味も無く怒り始めたのはロボに対してではなく
コアを破壊された事で突然訪れた終わりを
上手く理解できないが故の癡癡の様な物だったのだ。



「おい、アイシャ、意識あるかー?。」

オステオン・クリューソスを倒したロボは燃えカスのような残骸を踏み潰しながら投げ出され無様な恰好のままのアイシャの元に近づき声を掛ける、その声は先程の機械音ではなくハスキーな声に変わっていた。

「……うあ……ん……はあ……はあ……。」

抜けきらぬ快感にビクビクと体が痙攣しているが、どうやらアイシャの意識はあるようだった、しかし固まった頭の所為で喋れはじないらしい、そんなアイシャを見てロボは

「ちゅ。」

と舌打ちしつつ腰のアイマリを開き、中から水が入ったボトルと布を取り出し、水を含ませた布で汚れたアイシャの体を拭い始めた。



「あ……あうあ…… ルーメ、助かった、ありがとう。」

しばらくしてなんとか頭が動き、
喋れるようになったアイシヤが目の前のロボットに礼を言う。

「今はフォルメクスだ、忘れたのか、まあいい。
おい、てめえ、なんで最初の光を受けた時に突っ込んでいった?。」

ルーメと呼ばれたがフォルメクスと名乗ったロボだが、
アイシヤの礼に答えるでもなくこの迷宮に入った時の
アイシヤ達の行動に関して詰問する。

「え? だって急ごしらえな迷宮だったから突っ込むのがセオリーでしょ?。」

「あそこまでの状況ならまずは待機だろうが!!。」

あっけらかんと答えるアイシヤに
フォルメクスの怒声が浴びせられる。

「え、つとだってあんな危ない罠作つた奴がいるかもしれないじゃん?、
逃がしたらマズイって思うじゃん?。」

「結果、お前は罠にハマつてこのザマか?。」

「あう、その……ね♡。」

「ガラクタマーゴハンターが。」

「もう、相変わらず口が悪いなあ、女の子なんだからそうゆうの
辞めようよフオーちゃん♡。」

「あ?、てめえバラバラにして殺すぞ?。」

フォルメクス、

アイシヤのアニマウエポンの二つで通常は右足のガントレット内の空間に格納されている。

一人称がオレで口の悪さから勘違いされるが、その精神は女性である。

——その昔、アニマウエポンを作ろうとした人間の女性科学者がいた、彼女は研究の末アニマウエポンを作り出す事に成功する、しかしそれは中身を伴わない抜け殻のようなものだった。

アニマウエポンはそれ自体何故生み出されるかも解明されていない代物なので中身が伴わない外枠だけでも作れただけでも奇跡的なのだが、当然彼女は納得せず更に研究にのめり込むもその後の研究が悉く上手くいく事は無く、ある時人間の命で完全なアニマウエポンが作れるという間違った方法を結論としてしまった。

いよいよ完成間近の時、ある事件が起こりそれに巻き込まれた彼女は命を落とす。だがその精神は偶然自分が作ったアニマウエポンに取り込まれ、奇しくも自身の身で研究を完成させる事になってしまう。

アニマウエポンはマーゴハンターから生まれる、そしてマーゴハンター無くして存在は出来ない、偶然生まれた異端のアニマウエポンだがその理から逃れる事は出来ず、単体で存在し続けられないその身は滅ぶのも待つしかない。

しかし複数のアニマウエポンを扱えるという特殊能力を持ち、短い時間でも関わりを持ち、喧嘩別れしたとしても簡単に人を見捨てないお人好しなマーゴハンターがその事件に関わっているような幸運が重なったならばその運命は大きく変わる。

そして彼女は元の名も含めた全てを捨て、アイシヤのアニマウエポン「フォルメクス」として生きる道を選んだのだった。——

「なんでお前らは揃いも揃って猪バカなんだよ、特にレントだ、あいつがお前の行動を真似るのは看過できん。」

「そんな事ないよ、あの子はおの子で自分の道を……。」

「師匠の影響を受けねえ弟子がいるわけねえだろうが!!、
だいたいおまえは……。」

ガミガミクドクド、フォルメクスのお説教が始まる、
口は悪いが彼女は非常に面倒見が良い部分があり、
それ故に言いたくなる事も多いのだろう、

だがフォルメクスはアイシャだけに非常に厳しく、
出てくると必ずお説教大会になるし、
優しい部分等見たことが無いのだが、

どうもレントが言うのはたまに相談に乗ってもらっているし
優しくしてもらった事も沢山あるという話を聞いている、
が、その話はきつと何かの冗談だとアイシャは思っている。

「ねえ、溜め込むのやめようよ、お説教なら聞くから
家でとか小分けにしてよ。」

「は?、今回みたいな近場じゃないと俺は出れねえだろ?。」

体を失ったフォルメクスの精神は電子生命となり
主にアイシャの自宅を中心としたセキュリティを担当する
複合インターフェースを担っている、

自宅での彼女は口が悪くないどころか優しく丁寧な口調で、
必要以上に喋る事無く、
痒い所に手が届く完璧な仕事をしてくれる
本当に頼りになる存在なのだ……。

「なんで外でだけなのよ、いや、だつたら範囲広げようよ、通信範囲携帯より狭いなんて…。」

「狭いからなんだつてんだ、オレの仕事をこなす為に必要な範囲でやつてんだろうが。大体今回はオレがいたからいいもの。本来オレが出てくるような事態にならないように立ち回るのが普通だろ、クラス5の肩書がゴミになつてるじゃねえか!!。」

「フォルメクスの精神が直接アニマウエポンに入れる範囲は決して広いとは言えない、本人曰く特殊な独自回線を使っているので過剰に広げ過ぎると仕事が出来なくなるという事らしい、

しかし本人が入ると非常に口うるさくなるのでアイシャとしては家にいる時から小まめに発散して欲しいと言っているのだが、インターフェイスとアニマウエポンの公私混同はしないの。一点張りで受け入れてくれないのだ。

「わかったわかった、反省するから、それよりレンとカルミアは大丈夫かな?。」

これ以上反抗してもやぶ蛇と判断したアイシャは無理矢理レントとカルミアの安否に話を持っていく。

「それにな……おう、そうだな、位置は確認してる、ただ同じ位置から動いていない、もしかしたらお前みたいに捕まつてるかもな。」

「どうしよ、直ぐに助けに行きたいよ…。」

「はあ、仕方ねえな。」

フォルメクスの背中に生えたアームの様なパーツの内2本が分離し分解しながらアイシャの体にまわりつく。

フォルメクスは大きさ数センチサイズの大量の小型マシンが組み合わさり様々な形態になる事が可能な遠隔操作タイプのアニマウエポンである。

しかしアイシャにはそこまで高度な遠隔操作能力はないので普段は1ブロックを大きくし使える形態を限定する事で運用している。

だが今のように本人が入っている時ならばその能力を完全に使う事が出来る。

「ドレインまでいかなかったのは運が良かった、バッテリーとして十分使えるな。」

「あの…。」

「なんだ?。」

「もうちよつと人として扱ってほしいです。」

「お荷物の扱いとしては妥当だと思うが?。」

「ハイ…:すいません…:。」

「あと…服が着たいんで、サブアニメ付けてもらっていいっすかね?…。」

「まあ裸族を吊るす趣味はねえからな…めんどくせえな。
…ほらよ、さっさと服着直せ電池。」

アイシャにまとわりついたパーツはアイシャを簀巻き状態にして残ったアームにぶら下げるという状態にしたが破かれた戦闘着まではどうにもならない、
何とも無様な姿を晒す事になるので、
アイシャは投げ捨てられたサブアニメを
フォルメクスに拾ってもらい
付け直してもらおうと戦闘着を新しいものに取り換えると、

「ちよつとルーメ!、バッテリより扱いが下がつてる!!
あんたさっきフォーちゃんつて言ったの根に持つてるでしょ!。」

更に悪くなる扱いの雑さに抗議する。

因みにルーメとはフォルメクスの愛称で
普段は皆そう呼んでいるが、

フォーちゃんというのは生前の名前の二部らしく、
唯一昔の事を知るアイシャがたまに茶化して呼ぶと怒るのだ。
いつもは軽い反抗のつもりで使うので、
今回も軽い冗談のつもりで言ったが案の定フォルメクスの
怒りに薪をくべただけなので
扱いが悪くなるのはアイシャの自業自得といえた。

「黙れ、電池が喋るな、さあ行くぞ、まだ説教も終わってないからな!!」

「もーっ!」

アイシヤをぶら下げたまま歩き出すフォルメクス。

クリューソスを失い迷宮自体はその機能を停止していた、だが2人を捕らえたままの他のオステオンシリーズは、王を失っても活動する為、フォルメクスはその全てを1人で相手にするのだが……。

フォルメクスは使用に様々な制約があり、エネルギー消費も多く多用が難しいアニマウェポンなのだが、条件さえ満たせば、アイシヤのエネルギーを増幅したり、アイシヤ以外のマーゴハンターも使える武器を作れる等、その能力の幅は広い。

その機能の一つに人型形態時、アイシヤが戦闘せずアニマウェポンも使わず、エネルギーが使える且つ十分な量がある場合、フォルメクスはアイシヤの能力の殆どを使う事が出来るのだ。

元々、このオステオンが作り出す迷宮はマーゴハンターの力を奪う光の所為で厄介だっただけで難易度は低かった、なのでその後は特に問題が起る事も無く迷宮はフォルメクス1人で完全に破壊された。

マーゴと繋がっている人間組織の繋がりは一部判明したが、問題のガーセクトの痕跡は残念ながら掴む事は出来ず、今回の任務はアイシヤ、レント、カルミアにとって反省の多い非常に手痛い結果になったが、疲労困憊の3人には帰りの道すら延々と、フォルメクスにお説教され続けるという任務が待っており、

あれは本当に辛い任務だったと、後のアイシヤは語ったという――。

オステオン・クリューソス(オステオンシリーズ)

ラクエウス・ガーセクトが製造するトラップ、「アイテム」の1つ。
建物に設置すると内部を迷宮化しトラップを自ら作り出す事が出来る
自己拠点製造型アイテム。

3つの胴體は金属質のスライムで、
銅色のカルコスは力が強く、銀色のアルギュロスの一部を硬質化し、
拘束具等を作成し、金色のクリューソスは両方の能力を持ち合わせている。
また能力を付与した宝玉を嵌め力の増強が出来るなど
バリエーションを持たせる事が出来る。

発動には生きた人間にクリューソスを融合させる必要がある。
融合した人間は最初の形態を経て第2形態へと変化するが
その形は取り込んだ人間の思考を元に構築される。
またクリューソス固有の能力として、
相手の骨を能力的に固め行動不能にする効果がある
液体を使う事が出来る。

全ての能力を使いこなすには相応の時間を要するがその間は
力の使い方をガイドする声が頭の中で聞こえ、アシストしてくれる。

当初計画されたプランによると獲物を
取り込みエネルギータンクとしたり、隷属させるための特殊な衣装を
作成する能力などの機能が予定されていたが様々な失敗が多発したことで
計画自体が保留とされたまま使用期限間近にラクエウスの旧知の術者
に貰った特殊な鉱石等を加え無理矢理仕上げて使用される事になった。



ヘリオディクス

アイシャの右足のガントレット内に内包されている
アニマウェポン。

数cm大の小型メカが組み合わさり
様々な形態になる事が出来る。

だが、アイシャは遠隔操作に長けているわけではないので
現在はある程度の大きさのパーツで設定しておき
それを組み替えて使用している。

その出自はある女性科学者が作り出した
人造のアニマウェポンである。

だがその研究はアニマウェポンの外枠を作るに留まる。

そんな折、ある事件に巻き込まれたその科学者は
命を落とすがその精神だけが

アニマウェポンと融合してしまう。

アニマウェポン単体で生きる事は不可能なのだが、

その事件に偶然アイシャが関わっており

様々な経緯もあって契約する事になり命を繋ぐことになった。

普段は電腦精神がアイシャの自宅周辺の

セキュリティを中心とした複合インターフェースとして

活動しており、人型形態としてアニマウェポン本体を

扱えるのは独自に構築したネットワークの範囲内のみである。

条件次第でアイシャのサポートや能力増強等

アイシャの助けになってくれるが、

人型形態の時のみ非常に口が悪く

兎に角アイシャにだけ厳しいのが

アイシャにとっての難点である。

